

涼味燦々夏模様



LALIQUE





(上) 広々とした110㎡のコーナースイートは、自然素材を生かした贅沢で心地良い空間。
 (中) 朝食やカフェ、カクテルタイムを楽しむことのできる最上階のエグゼクティブラウンジ。
 (下) 9月2日までの期間限定で提供されるKANADE TERRACE「夏のアフタヌーンティー」。



旧目黒雅叙園本館玄関を再構築した和室宴会場入り口。日本画家・尾竹竹坡原図、彫刻家・盛鳳嶺による艶やかな彫刻の見事に圧倒される。

日本美が薫るミュージアムホテル

ホテル雅叙園東京

2017年にホテルとしてリブランドしてから1年。創業90周年を迎えるホテル雅叙園東京は、日本美を集結させたミュージアムホテルとして唯一無二の存在感を放っている。「昭和の竜宮城」とうたわれた絢爛豪華な空間を、今こそ堪能してほしい。

Text Rie Nakajima

エントランスをくぐると、そこは別世界である。色鮮やかな日本画や木彫板などの美術品の数々、その先に広がる日本庭園や滝の風景。日本の美意識が凝縮された空間に、しばし呆然と見とれてしまう。一般にはまだあまり知られていないが、館内には見渡せるもの以外にも、見逃すことのできない珠玉の美術品が数多く継承されている。外国人はもちろんだ、日本人でも思わず驚嘆する日本美の世界を、ゆっくりと堪能できるホテルは他にないはずだ。

ホテル雅叙園東京は、1928年に「芝浦雅叙園」の名で純日本料亭としてスタートした。後に目黒に移り、日本初の総合結婚式場「目黒雅叙園」として長く親しまれ、昨年4月にリブランド。「ホテル雅叙園東京」として新たな歴史を歩み始めた。

その唯一無二のオリジナリティーあふれる存在は、創業者である細川力蔵氏の魂そのものだろう。「訪れる人が本物の芸術に酔いしれ、夢見心地になる空間を作りたい」という思いから、当時一流の芸術家を集結させ、壁画や天井画、螺鈿細工の装飾など、まさに館内全てに手を尽くした。東洋一の殿堂を生み出した。

90年の時を経て、その魂は大切に受け継がれ、輝きを放つ。建物は東京都の指定有形文化財である「百段階段」を除いてリニューアルされたが、美術品や装飾品の数々は移築して残されたのだ。現在、館内で見られる日本画は約700点。日本芸術の中でも、山水画などより美人画や花鳥画など華やかなものが集められた。

極彩色の彫刻で飾られた「漁樵の間」、日本画に螺鈿を組み合わせた和室宴会場「竹林」、日本画家・尾竹竹坡原図、彫刻家・盛鳳嶺によるあでやかな彫刻に彩られた和室宴会場入り口、壁から天井扉に至るまで、びっしりと螺鈿細工が施された日本料理「渡風亭」の「竹坡」など、見どころは尽きない。一見して華やかなだけでなく、近寄ってみれば、その技術の繊細さや、多彩な技法が駆使されていることが分り、何度も感嘆させられる。ミュージアムのような見ごたえがありながら、何ものにも遮られることなく心ゆくまで大作を鑑賞できるのは、ホテルならではの良さ。

一方、ホテルとして近代的でリラックスできる空間であることにも言及したい。「和敬清心」をテーマに設えられた7階と8階の客室は、全て広さ80㎡以上のスイートだ。最上階の8階には、眺めのいいエグゼクティブラウンジも用意。館内の日本美術にも調和する、和のデザインが心地良い。

目と心をこのうえなく楽しませる絢爛豪華な日本美の数々と、気持ちよく滞在できる洗練された空間。「昭和の竜宮城」は、宿泊施設としての機能を付加され、より理想的なおもてなしの舞台へと生まれ変わった。創業90年を迎える「ホテル雅叙園東京」が織り成す極上の雅な世界を、ぜひ体感してもらいたい。